

FASID 第223回BBLセミナー報告（記録要旨）

テーマ：ハラール対応による食と観光～宗教文化への理解とビジネス

日時：2017年6月2日（金）12時30分～14時00分

場所：FASID セミナールーム

講師：友松篤信氏（株式会社F&T Japan 代表取締役／宇都宮大学名誉教授）

出席者：民間企業、大学、NGO/NPO、公的機関、個人より合計44名

1. 発表要旨

【はじめに】

- ・日本のムスリム（イスラム教徒）人口は0.1%程度（18万5千人）であり、日本人は普段ムスリムに接する機会が少なく馴染みがない。知らないからハラールに関心がないとも言える。報道ではテロやISなどムスリムに対するマイナスなイメージを抱かせるものが多いが、ほとんどのムスリムは非常に穏やかな生活を好み、ごく普通の生活を送っている。まずはムスリムの生活や考え方への理解を深めた上で、国際協力やビジネスを考えてほしい。
- ・宇都宮大学の中にムスリムの留学生が50-60人いる。ムスリムに日本に馴染んで生活してもらったり、観光してもらったりするにはどのようなようすればよいかを考えるため、毎週1回留学生たちとハラールに関する研究会を開いている。

【ムスリムの生活】

- ・ムスリムを日本人が理解するのが難しいのは、イスラム教が一神教だからである。一神教では、信者は人と人との関係よりも神との関係を優先することが基本であるが、この概念が日本人には分かりづらい。そのため、日本人はムスリムに対して様々な疑問（「なぜ忙しくても礼拝のために現場を離れるのか？」、「なぜ安価で栄養のある豚肉を食べないのか？」など）を持つが、ムスリムからすると神に対して科学性や合理性から「なぜ」という質問は本来ありえない。すなわち全知全能の神によって創られた人間が神の意図に疑問を持つことはありえないのである。この考え方はイスラム教だけでなく一神教の宗教（ユダヤ教、キリスト教）にも共通している。
- ・ムスリムの義務「五行」信仰告白（シャハーダ）、礼拝（サラート）、喜捨（ザカート）、断食（サウム）、巡礼（ハッジュ）のうち、礼拝は毎日の行（義務）である。礼拝は毎日5回であるが、旅行中（90km以上の旅行）は2回と3回目、4回目と5回目はまとめて行うことも可能である。

【ハラールとは何か】

- ・ハラール（halal）とはイスラム教の戒律（イスラム法）に即している事柄や行為のこと。反対語はハラーム（haram）。事柄や行為がハラールかハラームは人間が決めるのではなく、神が決める。ハラールは食、観光、医療、金融など様々な産業に関わってくる。以下はハラールとハラームの例であるが、ムス

リムは日常の生活で感覚的にこれを行っている。報償と懲罰は来世に神から与えられるものであり、最後の審判の際に報償が多く与えられれば天国に送られ、懲罰が多ければ地獄に送られるという考え方である。

イスラム法が対象とする行為（例）

ハラール		
義務	行うと報償、行わないと懲罰に値する行為	(具体例) 信仰告白、礼拝、喜捨、断食、巡礼
推奨	行うと報償、行わなくても懲罰はない行為	(具体例) 人の過ちを許す、右手で食べる
合法	行っても行わなくても報償も懲罰もない行為	(具体例) ゴミの片付け、規則正しい生活
忌避	行っても懲罰はないが、意図的に行わないと報償に値する行為	(具体例) 人に左手を使う、無駄遣い、口臭
ハラーム		
禁止	行うと懲罰に値し、行わないと報償のある行為	(具体例) ブタ肉、酒、それらの製造・販売、喫煙、窃盗、殺人、姦通、利子

- ・イスラム教は厳しい戒律が目立つことが多いが、同時に過ちを赦す宗教でもある。「ハラールを厳しい戒律にとらえるのではなく、神に祝福される行為にとらえる方がよい。」（東大名誉教授板垣雄三氏の言葉）

【ムスリムの規範の具体例】

- ・ムスリムの規範は、重要度が高い順にクルアーン（神の言葉、コーランともいう）、ハディース（ムハンマド言行録）、イジュマー（法学者の見解一致）、キヤース（法学者の類推）が根拠となっている。これらの文書に記載があればムスリムの規範の根拠となる。
- ・豚肉やアルコールはクルアーンで禁止されており、ハラームである。しかし、前述のとおりイスラム教は過ちを赦す宗教でもあり、飢えに迫られた場合は口にしても罪にはならない。
- ・ムスリムの女性がベールを被るのはクルアーンに「女性は男性の目から顔や髪、体を隠す」ことが記載されていることが根拠になっている。医療において異性を診察しないのもこれが根拠となっている。
- ・「左手で食べない、左手を人に使わない」、「同性でも一緒にお風呂に入らない」などは、ハディース（左手を使わないことについては、留学生によるとイジュマーではないかとのことである）にそれを禁止する記載がある。
- ・男女が結婚するまで親密にならないのも、クルアーンに「男女とも視線を低くして貞淑を守れ」という記載が規範の根拠となっている。
- ・JICAの研修で来日していたムスリムの女性研修生が、男性の研修監理員と接することで居心地が悪いように見えたことがあった。そこで男性を遠ざけ、女性の留学生を集めて話しかけさせたところ、女性の表情が変わった。これは、ムスリムの規範の中で男性と距離をおいている女性が、男性が近くにいることでストレスを感じていたからではないかと思う。

【ホテルでの接客】

- ・冷蔵庫にアルコールを置かない、豚肉を使った料理を出さない、同性による接待、お風呂への配慮（開放感のある内風呂は見られている不安を感じるため、ブラインドなどで窓を隠すなど）、礼拝への対応（メッカの方向を示す矢印（キブラ）の設置や礼拝用マットの用意など）等の配慮が必要である。最近ではキブラを示すアプリや礼拝の時間を告げるアプリもあり、ムスリムも活用している。

【食のハラール】

- ・イスラム教において豚肉がハラーム（禁止）なのはよく知られているが、クルアーンには「アラー以外の名を唱え（殺された）もの」を禁止する記載があり、その意味では日本で屠殺した肉は豚肉に限らずハラームである。さらに豚からの派生品、ひいては日本で調整した肉の派生品もすべてハラームである。
- ・ハラールには「穢れ」という概念も含まれているため、豚肉の近くに置いた食べ物もハラームとなる。豚肉を調理した調理器具は洗浄したとしてもそこから製造される食べ物はハラームとなる。よって、ハラールをアルコールフリーの食品のみに限定するのは間違いである。
- ・ハラーム食品を入れた冷蔵庫はイスラム式のお清め（川の源流の清浄な砂と水を混ぜて洗浄後、水道水で6回洗浄する）を行えば使用できるが、お清めは1回のみ有効で、次にハラーム食品を入れてしまった場合は二度とその冷蔵庫は使用できない。
- ・では、ムスリムは日本では何も食べられないのかというとそうではなく、イスラム教は過ちを赦す宗教でもあり、他に食べるものがないような飢えに迫られた場合は口にしても罪にはならない。
- ・日本での食についてのハラール対応はレベル1（ノーポーク、ノーアルコール）、レベル2（味醂・しょうゆ対応）、レベル3（ハラール専用食材の利用）、レベル4（ハラール専用調理器具・食器の利用）、レベル5（ハラール専用の貯蔵・調理・洗浄）の5段階に分けられる。食材や調理条件を説明してムスリムが同意すればどのレベルの対応でもよい。

【ムスリムの訪日客を呼ぶ取組】

- ・栃木県の中にはモスクが4か所ある。ハラールである果物栽培している拠点と結びつけて栃木県にもっとムスリムを呼び込みたいと考えている。宇都宮市では、ムスリム留学生の情報を活用し、ビーコンという発信機を使ってどの店で何が食べられるかなど、ムスリムのための食べ物の情報を提供する観光情報システムを開発中である。このシステムによって、観光客は、スマートフォンにアプリをダウンロードすれば、どの店で何を食べられるかすぐに分かるようになる。

【最後に】

- ・日本のモスクの数は2000年より少し以前から増え続けており、仏教、キリスト教に続いてイスラム教は日本の宗教における第3の波になると思う。
- ・日本のハラール対応は、東京を除いて、東日本は進んでいない。ハラール対応は西日本のほうが進んでいる。

- ・今後、ハラール対応が進むにつれ起こることとして、日本でムスリムを日常目にするようになる、日本に観光、食品、美容、医療など多様なハラール産業が生まれる、東南アジアを起点にイスラム圏への輸出や企業進出が増える、イスラム研究機関が増えイスラムの研究が活発になる、世界に日本文化を愛好するムスリムの文化人や研究者が現れる等が考えられる。ただし、キリスト教の例から考えても、日本人ムスリムは人口比1%を超えることはないと考えられる。

2. 質疑応答

Q1：イスラム教では同性による診療が基本とのことであったが、サウジアラビアに駐在していた際にヨルダン人女性医師の診察を受けた。それはどのように考えるか？またスライドで南スーダンのムスリムの女性の話がもあったが、南スーダンの公用語は英語でキリスト教が多いのでは？

A1：男性医師もいたのに女性医師が診察したのであれば、そういう事例もあるということかと思う。将来の検討課題にする。南スーダンの女性の事例は、女性の出身地は北スーダンだったかもしれない。

Q2：ハラール認証制度に世界基準はあるのか？また日本ではどのぐらい普及しているか？

A2：品目別にハラールの認証を行っている団体はないと思う。またハラールにグローバルスタンダードはない。よってある国のハラールの基準が他の国で通用するとは限らない。日本では宗教法人、NPO、民間企業などがハラール認証を行っている。日本の場合はハラール認証がビジネス化しており正確な数は分からないが50団体ほどあると聞く。その中で宗教法人は2つか3つ。一般論でいえば宗教法人が行うハラール認証のほうが信頼できる。認証の仕方のレベルも様々ある。日本では輸送も伴うため、完全なハラール製品を扱うのは難しい。

Q3：留学生の留学の目的は何か？また食について好んでいる味があれば教えてほしい。

A3：宇都宮大学では工学部に留学する学生が特に多い。その他は農学部など。理系の女性が多い。日本での就職を希望する留学生も多く、英語ができるマレーシア人は企業にもメリットがあると思う。味について何を好むかは今後研究していきたいと考えているが、ハラールであることは絶対に重要。自国の味に近いものが好まれる傾向にあると思う。

Q4：宇都宮大学では他の大学に比べてムスリム受入の努力をしているのか？イスラム教の中でも、原理主義のように戒律が厳しい国と穏健派の国があると思うが、国別の対応は必要か？

A4：大学では努力はしていない。ただ留学生は先輩から声がかかることもあるのでそれで多いのかもしれない。国別の対応については特にしていない。イスラム法の学派は4つあり、典拠（クルアーン）を重視するのか、典拠とのバランスを考慮しながら現実に即して判断を重視する（穏健派）のかで学派が異なる。トルコやインドは穏健派であるハナフィー派のイスラム教徒が多い。東南アジアにはシャーフイー派のイスラム教徒が多くこの派も穏健派である。サウジアラビアに多いハンバル派、ワッハーブ派は典拠を重視する。ハンバル派からISが生まれている可能性が高い。国によって信仰している学派は異

なる。また学派は個人で決めことができる。どの学派であっても基本的にはコーラン、ハディースは遵守している。

Q5：ハラール対応の5段階レベルについて、レベル2（味醂、醤油対応）の場合はどの程度のムスリムが受け入れるのか？日本でハラールを謳っている食品やレストランの対応のレベルは実際にどのくらいか？

A5：ハラール対応食の試食会にある留学生と行った時に、料理に味醂を使ってしまい、それについて板長さんが「味醂は加熱しているのでアルコールは蒸発している」と伝えたところその留学生は「分かった」と言って食べたことがある。ただしそれを食べるかどうかは、その場の状況にもより、個人差があると思う。日本のハラールレストランについては、食べ物もハラールであっても日本人のお客も来るのでアルコールを出す店も多い。栃木県でムスリムが年間 2,000 人ほど食べに来るラーメン店で、ムスリム用の調理器具は分けてはいるが日本人には豚を出している。

以上